

# 市民俳歌柳壇

## 俳壇

星田一草 選

### 閉校を待つ小学校小鳥来る

◎選評 閉校になることが決まった小学校。母校であろうか。寂しい。友達のこと、先生のこと、走り回った校庭などが走馬灯のようによみがえってくる。渡って来る小鳥たちも友達であった。「小鳥来る」からたくさんの楽しかったことを思い出している様子がかがえる。深い感慨が込められている。

秋刀魚焼く夕映え殊に美しく

鑑山町 湯沢 くに

新米の艶にほひ立つ朝の膳

平松本町 伊藤 安

名月や宮饅頭を買ひにゆく

さつき3丁目 伊藤 幸子

毛氈の野点の客や秋あかね

峰1丁目 郡司 紀子

## 柳壇

荒井宗明 選

### 迂りこみセーフは知らぬ洗濯機

◎選評 洗濯機もお母さんも僕の活躍を知らない。今日の野球だって僕の滑りこみで勝ったのに、「あらあら、またこんな汚して」とユニホームの汚ればかりを言う。洗濯機も黙って回るだけだ。お母さんたち、たまには、お子さんの話を聞いてあげてください。

本当に怒り言葉を改める

下田原町 五十嵐由美子

仲の良いことにおく鶴と亀

平松本町 鶴牧三千弥

生煮えで終わった恋の影法師

池上町 堂前登喜子

咽喉を買って女子会から帰る

下栗町 大塚 榮子

## 歌壇

安野登美子 選

### 林立する高層ビルを見上げれば 矩形の空が蒼く抜けゆく

◎選評 高層ビルが林立する一点景が作者の目前に現れる。「林立」が市街地の現状を納得させられる。視線は矩形(食方形)の旧称の空に転じる。一幅の絵の輪郭を成し、縦長の長方形の中に高層ビルが納まり、「蒼い空」を背景に絵のように立ち上がる。歌材の組み合わせの巧みさと、蒼い空に高層ビルがすっぽりと入る浪漫を感じる一首である。

夕暮れの小路に甘き香放ち  
吾が足止むるおしろい花よ

緑2丁目 片嶋 青水

再びは訪ふこともなき故郷に  
飯豊連峰確かとたしかむ

今宮2丁目 赤城 恭平

届かざる柿の実眺め鳥の餌に  
残してあげよう命つなぎに

駒生町 駒場 幸子

秋の朝小窓開ければひんやりと  
木犀の香の部屋に入りくる

下荒針町 石川 幸子

●下岡本町 高尾 信尚

●泉が丘1丁目 川里 宏

## うつのみやの歴史を紐解く物語

## 第8回 2つの追分、水運の鬼怒川 河岸編 人・物・情報の交流点 うつのみや



江戸時代になると、水運による物資の輸送が盛んになります。宇都宮城下の周辺でも鬼怒川や姿川に河岸がつくられました。河岸とは、河川や湖沼沿いに物資や人を運送するためにつくられた川船用の着岸場のことです。

■鬼怒川上流域の河岸 鬼怒川上流域には、板戸・石井・桑島などに河岸があり、宇都宮藩や会津藩などの物産を江戸に送る水上輸送の重要な役割を果たしていました。中でも奥州米は江戸で消費される米の多くを占めていたそうです。また、最上や米沢地方の紅花、ろう、漆器なども運ばれていました。

毎年、清原地区で行われるマラソン大会の際には、鬼怒川の船頭さんたちが食べていたであろう「船頭鍋」が参加者に振る舞われています。

■姿川流域の河岸 栃木街道を南下し、壬生町との境の淀橋付近に、幕田河岸がありました。鹿沼宿

からの商い物や宇都宮藩の年貢米などを積み、思川の合流点の半田河岸を経由し、江戸に物資が運ばれていました。船の積み荷は年貢米の他、炭や板、麻やかんぴょうなど、この地域の特産品がありました。

■水運から鉄道へ このように流通の中心を担っていた水運ですが、明治期に鉄道が開通すると、鉄道輸送にその主役の座を譲ります。なお、旅の際に車内で食べる駅弁の発祥は宇都宮駅との説があります。

宇都宮は、街道だけでなく、水運や鉄道により、人物・情報が行き交い、新しい学問や芸術文化などを常に吸収し、変化しながら発展してきた街なのです。

☎文化課☎(632)2764



▲板戸河岸跡に立つ記念碑

◎俳歌柳壇 応募方法 1人に付き俳句3句、短歌3首、川柳3句以内。対象は市内在住の人で、未発表作品に限ります。はがきに、作品(漢字にはふりがなも付けて)・住所・氏名(ふりがな)・応募する壇名を書き、毎月20日(消印有効)までに、〒320-8540市役所広報広聴課へ。俳句・短歌・川柳の併記は不可。市内に在住か通学している小・中学生からも応募をお待ちしています。☎広報広聴課☎(632)2028